【個人研究】

ペルソナ心理学と日本的意識

高尾　浩幸*

Persona psychology and Japanese consciousness

Hiroyuki TAKAO

This study deals with the Japanese consciousness, which externally influences Japanese.
The Japanese consciousness has specific characteristics in comparison to the Western consciousness. Instead of the ego, the persona plays a central role in the Japanese consciousness. As Jung contends, the persona is the face displayed to the outside world. Why and how has the personal come to dominate the Japanese consciousness?
This work draws on Japanese myths in the Kojiki, which explains the roots of the Japanese consciousness. "Island" is a symbol of the consciousness, so this work focuses on how land was created in Japanese myths.
Japanese lands symbolize the birth of the Japanese consciousness. Based on the attitudes and behaviors of the heroic god Izanagi in the myths, land was created in the following process: (1) Gods in heaven offer advice on creating land, (2) The husband god and the wife god fill their respective roles, and (3) Impurity comes from the outside world, and shame arises. This process constitutes the Japanese consciousness and is still evident in the contemporary Japanese mindset.
The Japanese Emperor is the direct descendant of the god Izanagi. According to the Japanese Constitution, the Japanese Emperor is the symbol of the Japanese people. The Imperial system has greatly influenced the Japanese mindset. By performing rituals and reading myths, Japanese people assume the Japanese consciousness. As a result, contemporary Japanese have a consciousness dominated by the persona.

Key words：Persona psychology, Japanese consciousness, island, Kojiki, myth
ペルソナ心理学、日本的意識、島、古事記、神話

1. ペルソナ臨床

心理臨床の場面で、似たような訴えがなされることが多い。例えば、女子中学生・高校生は、「グループからはじかれている。グループが息苦しい」と悩む。社会人となった新人は、「常識がないと言われる」「普通がわからない」と訴える。さらに家庭の中においては、嫁が夫の家族の話し合いに招かれなかったことから、「私はていのよいお手伝いなのか？家族の一員ではないのか？」と苦しむ。

これらの思い悩みには共通点がある。彼らは、1対1の人間関係は築くことができ、適切な対応をとることができるのに対し、「集団」と自分とのつき合い方に悩み、途方にくれてしまうのである。

心理的援助の場に限らず、一般の「人間関係の悩み」の中にも、こうした集団とのつき合い方が

* たかお　ひろゆき　文教大学人間科学部臨床心理学科

多く含まれると考えられる。個人が集団とのつき合い方に強い関心をもっていることの証として、2−3人の小グループでの雑談において、所属集団の他のメンバーについての情報、うわさ、評判、陰口、悪口といった話題が非常に好まれる。他のメンバーについての情報を交換することによって、必要に応じて自分と集団との関わり方を修正して適応を図るための話題であり、結果として不安を低減させてくれる効果がある。

このように集団とのつき合い方は、日常生活、ひいては人生において大きな影響をもたらす。「世間」という言葉とも近い関係にある、集団とのつき合い方には、どのような特性があるのかを、日本人の集合的意識の起源を示す古事記神話から探っていきたい。なお、ここでいう集合的意識[1)]とは、ある集団のもつ規範、基準、掟、慣習、価値観、システムのひとまとまりを指す。

2. スイス人のなかの日本人 ――「言葉」か「立場」か――

筆者は、ユング派分析家のトレーニングを受けるため、スイスのチューリッヒ近郊に4年間滞在した。家族と共に、日本人が一人もいない町で生活していくうちに、スイス人と自分との相違、違和感を感じるようになった[2)]。

スイス人は「言葉」をとても大切に使っている。例えば、買い物に行って欲しい商品を指さし、「これ」と言っただけではまず売ってもらえない。「私はこれを買います」と言葉にする必要がある。その意思表示を受けて、店員は商品を売る作業を開始する。また、病院に行って「お腹が痛い」と症状を訴えるだけでは不十分である。診察、検査の結果、医師は治療法を提示し、「どうしますか？」と尋ねてくる。そこで、患者は「薬を出してください」と言葉で意向を伝える必要がある。

筆者は最初、生活のどこでも自分の意志を求められることに緊張とおっくうさを感じていた。買い物をするためにお店に来ていること、ぐあいが悪いから病院に来ていることは明らかなのだから、いちいち言わなくても自動的に進めてくれれば良いのに、と思っていた。こうした日常生活の違和感から、そもそも「自分の意見など言いたがらない自分」がいることに気がついていった。

心理学的にとらえてみると、自分の気持ちや欲求を言語化することは、自我意識のなす重要な機能のひとつである。ところが、日本のお店に行くと、指さすだけで商品が買えたり、医師の前で「ここが痛い」とお腹を示すと、あとは検査、治療、投薬とほとんど自動的にやってくれるのは、「お客」「患者」という立場がおおいに機能するからであって、そこに「わたし」という個人、個人の中で機能する「自我」が関与し、発言しなくても構わないからである。

つまり、日本の社会生活においては、自我（わたしを感じている自分）よりも社会的に与えられる「立場や役割」が大きな働きを担っているといえる。このように、心理的に大きな働きをなす立場や役割は、われわれのこころの中で、いったいどのような機能を果たしているのであろうか？

3. 肥大化する「ペルソナ」

個人のこころのなかで、外向きに、周囲に、世間に向ける顔をスイスの分析心理学者C・G・ユングは「ペルソナ」と呼んだ[3)]。そもそもペルソナとは、ラテンの古代劇において役者が顔につけた「仮面」のことである。現代の社会生活では、性別、世代、社会的地位、職業、立場、役割、さらには学歴、家系、親の職業までをも意味する。つまり、ペルソナとは、それらを個人が担うときに、その個人が心理的に身につける一切の仮面、身なり、振舞いを指す。

ユングはさらに、自我と内的な世界を媒介する

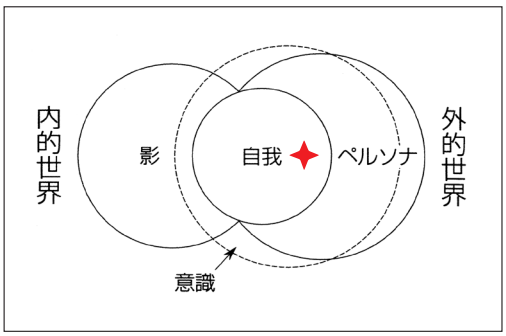

図1　西洋人のこころ

層を「影（shadow）」と呼び、図1に示したようなこころの構造モデルを考えている。図1から分かるように、「ペルソナ」と「影」は自我の両端に位置し、あたかもシーソーのように意識のバランスをとる働きをしている。

一般にペルソナは明るく肯定的な性質を帯びやすい。誰しも、明朗闊達で世間に受け入れてもらいやすい「仮面」を選びたがるからである。すると、こころのバランスをとるべく、「影」は暗く、非論理的、非倫理的で否定的な性質を帯びやすく、加えて意識されにくくなる。つまり「影」とは、人格の否定的な側面、好ましくない性質、劣等で、価値のない、原始的な性質、自分の暗い側面の総体を指す。ユングは、「そうなりたいという願望を抱くことのないもの」と、影に明瞭な定義を与えている[4)]。

西洋的なこころの構造モデルで注目すべきは、意識の中心に自我が位置することである。西洋人にとっては、常に意識されているのは「私」「私が」「私の」「私を」「私に」であり、生活と人生の中心点は自我をめぐって展開していく。日本人にも自我はあるのだから、事情は同じだろうと考える読者がいるかもしれないが、はたしてどうであろうか。

図2は、筆者がスイス体験をもとに作成した、日本人のこころの構造モデルである。日本では、自我よりも「立場や役割」が優位に機能していることから、日本人のペルソナが肥大化していると考えられる。

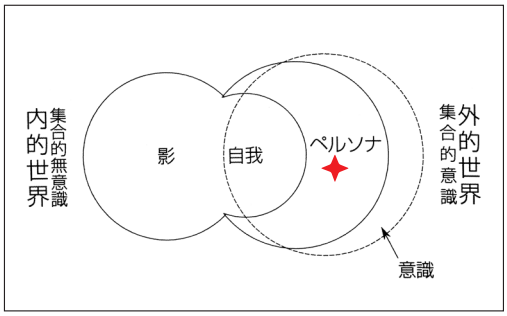

図2　日本人のこころ

図1の西洋人のこころの構造と大きく異なるのは、西洋人の意識の中心が自我にあるのに対し、日本人の場合はペルソナが意識の中心を占めている点である。そのため、西洋的視点からするならば、自我の肯定的なあり様を表わす「自分のことを大切に考える」「自分の意見を述べる」といった態度が、日本の伝統的な価値観に照らすと「利己的」「自分さえ良ければいいのか」と否定的にとらえられることとなる。こころの中心で作用する機能が西洋と日本で異なっているからである。日本人の意識の中心にはペルソナが位置し、生活の意味と自分の人生の評価は、ペルソナを基準として測られる。

もちろん、日本人にも自我はある。ペルソナだけで生きているわけではないので、実際にはペルソナと自我が相談や取引、場合によっては葛藤を起こしながら生活している。ユングが図1の構造モデルを考えたことから、こうしたペルソナと自我の綱引きは西洋人にもある。しかし、西洋人の場合は主たる自分は「自我」にあり、日本人の場合は主たる自分が「ペルソナ」にあると考えられる。この意味で、日本人のこころは「ペルソナ優位」と言える。

4.　日本的意識

前節まで述べてきたペルソナ優位の日本人のこころはどのようにして形成されたのだろうか？　いつ頃形成されたのか？　さらには、日本人のこころの基本構造に変化はあったのだろうか？

スイス滞在中に親しくなった友人と西洋文化について話しをしてみると、何人もの人が「自分たちの文化のルーツは、ギリシャと聖書にある」と語った。スイスは、ギリシャと離れており、キリスト教の歴史にもあまり登場しない地域である。それでも、スイス人にとっては西洋文化の担い手として、自分たちの文化的起源をギリシャ神話と聖書においているのである。

ペルソナ優位の日本人のこころの起源について、簡単な答えを用意することはできない。しかし、スイス人がギリシャ神話と聖書を土台と信じているように、日本人という集団が形成され始めた最初期にまとめられた、日本神話から日本人のこころの基盤をうかがい知ることができるのではないかと考える。

日本人という集団に属する個人の多くが、集団として共有している集合的意識、つまり日本的意識は、日本神話に表現され、規定されてきたのではないだろうか？

5.「島」に象徴される「意識」

日本的意識の起源を探るために、日本国家の草創期にまとめられた日本神話を読み解いていく。その際、こころ、意識、無意識といった目には見えないけれども確かに存在するものごとは、シンボル（象徴）として表現されることに注目してみたい。ユングは、「無意識を海に喩えるとするならば、意識は海のただなかに隆起してくる島のようなものである。」と述べている[5)]。象徴世界では、無意識が「海」、意識が「島」として表現される、というのである。

この「島」の表す象徴性から、日本神話の「国造り」過程に着目してみたい。国造りでは、意識を象徴する「島」から始まり、いくつもの神話的出来事を契機として、「国土」が形成されていく。日本神話における国土の形成・発展過程は、そのまま日本的意識が形成されていくプロセスを表すと考えられる。後に述べるように、日本神話に象徴的に表される日本的意識は、それ自体がペルソナ優位の構造をもち、ペルソナ優位の日本人のこころの構造の規範として大きな影響を及ぼすことになる。

さらに、日本神話成立以降の個人が日本神話を読むことで、神話世界の主人公の行動をまね、結果として、ペルソナ優位の意識、生き方を身につけていく。

6. 日本的意識の形成過程を表す古事記神話

西暦712年に編纂された『古事記』は、上巻、中巻、下巻の3巻からなっているが、とりわけ上巻には日本神話が書かれている。国造りにかかわる働きをした主人公は、イザナギとイザナミ、アマテラスとスサノオ、オオクニヌシの3つの世代にわたって、さまざまな神話的出来事を通して国土創世に寄与している。国土創世過程の全体については拙著を参照いただくとして、今回は、特にイザナギの国造り神話に焦点をあててみる[2)]。

イザナギ神話には、天地開闢、伊邪那岐命（イザナギ）と伊邪那美命（イザナミ）、オノコロ島の出現、二神の結婚、二神の神産み・国生み、火神迦具土神（ヒノカグツチ）とイザナミの死、イザナギの黄泉国訪問、禊祓（ミソギハラエ）と三貴子の誕生、といった多彩な神話的契機が語られている。本論では、この中の「オノコロ島の出現と神産み・国産み」、「夫婦としてのイザナギとイザナミ」、「穢れと禊ぎ」について取り上げ、イザナギの行動が規範となって日本的意識が形成されていく過程を論じる。

7. オノコロ島の出現と神産み・国産み

(1) オノコロ島の出現と日本的意識の誕生

古事記は、天地創造をまず、天に5柱の神々が現れた、と物語る。そして、天の神々は、ふわふわと漂っている国土をしっかりと固め完成するように、とイザナギ・イザナミの二神に命じ、天の矛を与えた。天の神々は、漂う国土を完成させ、天上界の意にかなった地上世界にしようと意図したのである。ここにははっきりと能動的な天の意志が現れ、未分化な状態にとどまり続ける受動的な大地へと働きかけがなされている。その働きかけの最初に、極めて男性的な「矛」が用いられた。

イザナギとイザナミが天の橋から、天の矛を海に差し下ろし、かき回し、引き上げたところ、矛の先から塩がしたたった。したたった塩が積もったところに、オノコロ島が出現した。この「島」の出現は、まさにユングが述べている「意識」の誕生を象徴している。日本的意識の中核は、天から地への働きかけによって誕生したのである。

(2) 天からの指示どおりに

イザナギとイザナミは、オノコロ島に降り立ち、天の御柱（アメノミハシラ）を立て、大きな家屋を作り、居を定めた。この御柱は、天と地を結ぶ階段、柱、つまり宇宙軸（cosmic pillar）である。天と地は、この柱を通じて行き来できる場所であった。

イザナギとイザナミは、この御柱の周りを巡って出会い、子産みを行った。ところが、最初に生まれた子は蛭子（ヒルコ）といって足が立たなかった。生まれた子がよくなかったため、イザナギとイザナミは天に昇り、天の神々に伺いをたてた。天での占いの結果、「女が先に言葉を発したのがよくなかった。やり直せ」との命が下った。二神はオノコロ島に戻り、今度はイザナギから「ああ、さてもよい乙女」と声をかけたところ、今度は順調に子産み、国産みが進んでいった。

女神イザナミが「ああ、さてもよい殿御」と自我のもつ自然な感情を発露していたのでは、子産み・国産みにとって不都合な結果を招いてしまう。むしろ、男神と女神の結合の仕方に、天からの「作法」や「掟」という神意が加えられること、つまり天の神々の介入と指示に従うときにのみ、創造過程が順調に進むことが示されている。国産みが進むことで、島から国土が広がっていくさまは、日本的意識の領域が順調に拡大していく様子を象徴している。

このように、日本的意識の誕生と領域の拡大に、天の神々からの介入と指示が作用したことは、自我の感情を抑制し、権威ある「外」からの意向に敏感となる「ペルソナ」を発達させる結果を日本的意識にもたらした。日本的意識の誕生時点から、「お上の言うとおりにやっていれば間違いがない」と刷り込まれたのである。

8. 日本人夫婦の原型としてのイザナギとイザナミ

イザナミが、カグツチという火の神を産んだとき、女性器に火傷をおい、それがもとで死んでしまった。夫のイザナギは妻の死をあきらめきれず、黄泉の国に妻を訪ねる。

黄泉国にやってきたイザナギは、「愛する妻よ。お前と一緒に造っていた国土はまだ完成していない。是非にも帰ってほしい」と親しく話しかけた。はるばる黄泉の国まで追いかけてきながら、イザナギの言葉はなんとも無粋なものではないか。この呼びかけから、イザナギにとっての妻は、第一に「同労者」であったことがわかる。妻の死にもかかわらず、イザナギは、以前と同じように国造りのために働いてくれる妻を求めていたのである。イザナギが執着したのは、個人としてかけがえのないイザナミというより、いっしょに働いてくれるという役目を果たしてくれる妻であった。

ここで、現代日本の家族を思い浮かべてみると、このイザナギ・イザナミの関係が、日本人カップルの典型的な在り方をあまりに如実に反映していて驚かされる。すなわち、夫には外の仕事があり、妻には家事という役割がある。二人に与えられた役目をちゃんと果たしていくことで協力しつつ家を建てあげてゆく、という生き方である。イザナギが、役割や立場を重視した行動をとったことは、日本的意識の特性としてペルソナが優位に働くことを示している。

そして、イザナギは、娘アマテラス（天照大神）を通じて、現在の天皇の直系の祖先として位置づけられている。現行の日本国憲法において「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」とされていることから、その祖先イザナギの行動、そしてそこに象徴されるペルソナ優位の日本的意識の起源は、今日の私たちにも大きな影響を及ぼすことになる。

ペルソナ優位の日本的意識が、今日の夫婦関係に与えている影響の具体例をあげてみよう。夫婦の価値観を調べた国際的な大規模調査の結果によると、日本人夫婦の価値観の一致率は36カ国の中で最低で、50％以下であった。妻は、夫が大切と思うことの半分も同意しないのである[6)]。

多くの日本人にしてみれば、夫と妻の価値観などズレていて当たり前と、この調査結果にさして驚くことはないのかもしれない。ところが、世界各国と比較してみると、どうも日本のカップルは「特殊」らしいのだ。それは、何に価値をおくかが男性と女性で大きく違っているのに、それでも一緒に生活している点である。実際に、日本人の離婚率は、世界的にみてかなり低いほうである。結局のところ、夫婦が、お互いの考えや価値観を共有しなくとも、共同社会から与えられる役割をこなしていれば、生活や人生が成り立ってきたということである。ここには、自我のもつ「考えや価値観」よりも、「夫は夫らしく、妻は妻らしく、

やっていれば良い」という「役割」を重視するペルソナ優位のこころのあり方が現れている。

9. 穢れと禊ぎ
――ペルソナ問題としての善悪――

(1) お天道様が見ている

従来、日本人には罪意識が乏しいことが指摘されている[7)]。筆者の遭遇した次の出来事は、現代日本人の罪意識を具体的に表している。

スイスのトラム（路面電車）には改札や検札はなく、乗客自身が切符を買ってから乗ることと決められている。つまり、自分以外は誰も切符をチェックしないのである。筆者が、日本からやってきた旅行者にこのシステムを説明したとき、誰もがまず「乗る時も降りる時も改札がないのですか？それではお金を払わないでも乗れますね」と受け答えをした。実際のところは、検札官がときおりやってきて、無賃乗車の場合は80フラン（約9000円）の罰金を徴収するので、99％の乗客がきちっと切符をもっている。驚いたことには、大学教授を含むすべての日本人が、同じようにまず「無賃乗車」を口にしたのである。日本人にとっては行動そのものに是非があるのではなく、「見つからなければ罪ではない」ということになっていると考えられる。「お天道様（＝イザナギの娘、天照大神）が見ている」、つまり「見られる」ことが日本人の倫理基準になっているからである。

(2) 外から来る穢れ

こうした「見られる」ことが善悪の基準となっているのはどうしてであろうか？　その起源は実にイザナギ（天照大神の父、天皇の直系祖先）の行動にある。

イザナギは黄泉国で妻イザナミの朽ち果てた姿を見て逃げ出した。自分の朽ちていく姿を「見られた」イザナミは、「恥をかかされた」と怒り、イザナギをとらえようと追っ手を使わした。イザナギは、追っ手を振り切り、黄泉国と地上の世界の間を巨大な岩で蓋をしてから、妻イザナミとの夫婦の契りを切り、清らかな河原で禊ぎをすることによって黄泉国の穢れを洗い流した。イザナギの禊ぎの結果、娘アマテラス（天照大神）が生まれ、現在の天皇の直系祖先となっている。

イザナギの行動が示すように、古代より日本人にとっては「穢れ」が重要であった。穢れは、洗い流すことで取り去ることが可能であり、禊ぎの儀式によって「清く」なることが一種の「救い」となる。身体だけでなくこころが穢れた場合も、一定の儀式作法をふむ「もの忌み」に服することで、清くなれる。

人間は穢れに染まることはあっても、あくまでも穢れは「外から」来てくっつくものであった。このように決して内在化しない、外部にしか付着しない「穢れ」は、常に自我の隣にある「影」を意識する「罪」と本質的に異なっている。「外から見られる」ことで恥がうまれ、穢れは「外から来て」くっつく。外との関係に起因する穢れと禊ぎを倫理基準とすることによって、善悪の判断は外向けの顔であるペルソナの問題となり、ひいてはペルソナ優位のこころの構造を形成・維持することとなった。

10. 日本的意識とペルソナ心理学の誕生

ここまでの論考によって、現代日本人の意識のあり方は、基本的には、古事記神話に示されているペルソナ優位の古来日本的意識がそのまま継続していることが示された。日本的意識成立以降に日本に生まれ育った個人は、成長の過程でペルソナ優位のこころのあり方（日本的意識）を取り入れ、当たり前のようにペルソナを中心とした人生を送っているのである。

自我を中心とする西洋人のこころの構造を前提とした心理学は西洋で発展し、日本に輸入されてきた。しかし、日本人がペルソナを中心とした人生を送っているとなると、輸入された西洋心理学をそのまま当てはめても、うまくいかないところが出てくるのは当然である。日本人の意識生活や心理的援助を考えていくには、日本的意識をふまえ、ペルソナが意識の中心として働いているという観点を織り込んだ心理学、つまり「ペルソナ心理学」の誕生が必要とされている。

文献

1）ヨランデ・ヤコービ（1959）、高橋義孝監修、池田紘一・他訳『ユング心理学』、日本教文社、1973、59頁

2）高尾浩幸、『日本的意識の起源――ユング心理学で読む古事記――』、新曜社、2001

3）C.G. Jung, Psychological Types, The Collected Works of C.G. Jung, Vol. 6, Princeton University Press, 1971, para. 370

4）C.G. Jung, The Practice of Psychotherapy. The Collected Works of C.G. Jung, Vol. 16, 2nd edition. Princeton University Press, 1966, para. 470

5）C.G. Jung, Child development and education (1928). In: The Development of Personality, The Collected Works of C.G. Jung, Vol.17, Princeton University Press, New York, 1954, para. 102

6）『アエラ』、1995年3月20日号、朝日新聞社、50－51頁

7）例えば、ルース・ベネディクトは、「罪の文化」と「恥の文化」といった対比を行っている。長谷川松治訳『定訳・菊と刀』、社会思想社、1967、224－262頁